昭和四十六年より地元の会社に入社、社内報編集、従業員の生活相談等に当たる。

作家生活　帰国と同時にシベリアを題材する小説を発表、その数約九十編に及ぶ。

表　彰　ペンネーム波木里正吉、熊日文学賞、西日本芸術奨励賞、九州沖縄文学賞、県賞、詩と真実賞その他多数受賞。

全抑協活動　昭和五十六年退社と同時に全抑協熊本県連合会事務局長に就任。現在県連副会長として活動中である。

（熊本県　高瀬　潤吉）

シベリア抑留

熊本県　高瀬　潤吉

ハイラル

華々しいスタートを切った大東亜戦争も、満三年を迎える昭和十九年の秋には米軍の空爆が日本本土に近づきつつあり、日本は何処とて安全ではなくなってきた。その頃よく言われたことは、日本にいるより満州の方がかえって安全だということだった。そのような昭和十九年の十月、私は入隊のため満州のハイラルに着いた。はじめて聞く地名であり、どの辺に位置するかもわからない。しかし、日が経つにつれそこは満州の北西部に位置し、ソ連との国境の町満洲里に近い所で、広大な守備陣地のある所だということ、そしてこれまで私の郷土熊本の部隊が守備していたこと等もわかってきた。陣地は広大だが守備隊が常駐する様子はなく、近くの兵舎で初年兵の教育を受けた。冬に向かっていたときであり、営舎の二重ガラスが真っ白に凍ってわずかにガラスの上の方からだけ外がのぞけた。班長の部屋に行くと二重ガラスの間は自然の冷蔵庫になっていて、時々凍った魚が何匹か入れてあり、休日に近くの河から釣ってきたのだということだった。夕方入浴して兵舎へ帰るとき、下げていたタオルはコチコチに凍って、上を向けると手の平の上で立った。南

国育ちの私には全く驚きであった。そんな冬の顔のハイラルでも、春になると野の草花が草原一面に咲き競い、それは見事な花園と化した。ここで充分な食料があり、暖房の石炭があればこんないいところはないだろうなあと思ったりした。しかし夏になると乾燥が激しく、時には砂あらしも起きた。

平穏な夢をむさぼっていた昭和二十年八月九日、夜もまだ明けやらぬ朝まだき、不寝番の「非常」の声で夢破れ飛び起きた。「ソ連軍が満洲里に攻め込んで来た」というのである。来る時が来たなあと思った。隊内ではかねてソ軍の侵攻が噂されていた。それからはあわただしい一日が始まった。完全軍装に取りかかるやら、命令受領にかけ回るやら火事場の一日であった。こんな物がどこにあったのだろうかと思ったのは真新しい毛皮の背のうである。日ロ戦争の残り物ではないかと思う代物で、誰しも初めて見るものであり、古年兵までが来て詰め方を手伝っていた。米、乾パン、缶詰等詰まるだけ詰める。ゆうに四十キログラムを超す。更に銃、弾薬、水筒等合わせれば六十キログラムを超す。二、三日前入隊したばかりの朝鮮の初年兵には可愛想だということで背のうではなく、雑のうと銃を持たせたように思う。その朝一度営庭に集合し、百五十キロメートル後方の天然の要塞興安嶺へ向け移動するということであったが、昼間は敵機の攻撃を受けやすいので夜になって出発することになり、兵舎の中で待機した。兵舎がソ連の飛行機の攻撃を受けなかったのが不思議であった。夜になりいよいよ興安嶺へ向かって出発することになった。ハイラルは兵站基地であり、兵舎、銃器庫、糧秣庫、飼料等あらゆる物が貯蔵してあったが、それら総てに火がはなたれ、ハイラルは真昼のように明るくその明かりを背に受けて興安嶺へと急いだ。程なくして私らより前を歩いている婦女子の大集団に出合った。乳飲み児を背負い、両手では別の子供の手を引いている者、背にリュックサックを背負い子供の手を引いている者、皆もくもくと歩いている。追い抜きながら「頑張れよ、頑張れよ」と励ます以外救いようがない。そのうちに兵隊の中からも強行軍に耐えかねて発狂する者が出始めた。

「分隊長殿、自分は元気であります」と言ったかと思うとバタリと倒れてしまう。そのままにしておけば後から来る敵の戦車にひき殺されてしまうだろう。道路から離れた所へ引きずり寝かしておく。「敵の戦車がすぐ後ろへ迫っているぞ。急げ急げ」と前線へ様子を見に行ったトラックの兵が大声を出して走り去って行く。ここは正に戦場そのものであった。

夜が白み出した頃、部隊の隊列はなく、三々五々に歩いていた。昨夜の強行軍に一緒に歩けた人は僅かであった。昼頃になり、私は背のうも、それまで手に持っていた擲弾筒も捨てて、水筒と銃だけの軽装にして歩いた。炎天下水筒の水もなくなり、喉の渇きがひどくなってきたとき水溜りがあった。急いで口を付け一気に飲んだ。後になって考えたことだが、平原の真ん中に水が湧くはずがない。牛か馬の小便だったのだろう。それでも渇きを止めてくれたのだからありがたい。夕方、人が集まっている駅に着いたら、最後の列車というのが止まっていて、何とか無蓋の貨物車にもぐり込むことができたので後は興安嶺まで楽に到着できた。そして興安嶺で陣地作りをしていた本隊ともめぐり会うことができた。それから三々五々だったハイラル組も逐次加わってきた。陣地掘りしていた本隊の宿舎は、土地を均し、その上に木の葉を敷き、上の方にも木の枝を並べて服のままごろ寝する野宿同然の姿だった。明日はいよいよソ軍を迎え撃つということで恩賜の酒がふるまわれた。

夜が明けた。いよいよ決戦の日である。所属の八中隊は興安嶺入口若豆山の守備が割当てられた。出発しようと隊列を組んで驚いた。興安嶺の本隊の一部には銃は無く、鍛冶場で短刀を作り、白樺の枝にくくり付けた装備である。何たることか、ハイラルの銃器庫には山程の銃があったのに火をつけて燃やして来た。本番で銃が無いとは、惨めな話だ。

若豆山には既に陣地としての壕ができていて、私の分隊は後方との連絡のため敵に対する正面ではなく斜後方に位置した。そしてその日の夕方には敵戦車が道路に沿って、山の周囲を取り巻くように展開した。夕方最後の飯上げと言ってにぎり飯が配られた。敵も戦

車のかげで夕食を取りはじめた。このまま何事も無く過ぎればのどかな風景である。そのような時、わけも無くW分隊が鉄砲を撃ち始めた。W分隊長は、隊内では上官に反抗ばかりして、煮ても焼いても食えぬ、兵隊用語で言う万年一等兵で、この度の戦闘には役立つだろうと急遽上等兵として、直前に入隊して来た朝鮮の新兵の分隊長に仕立てたものである。ことの起こりは、そのW分隊長が何が原因かはわからないが「ええ、撃て、撃て、この野郎！」だったと近くにいた人が後で話してくれた。ともあれそれをきっかけに本当に戦闘が始まった。山を取り巻いていた戦車が一斉に戦車砲の集中攻撃を始め、こちらが静まったところでマンドリン銃（片手で持てる機関銃）を一斉に連発しながら山上へ駆け上って来た。夕闇迫る頃であった。夜になって後退の命令が出て後方の部隊集結地へ向かった。集結地では夜が明けて点呼のとき、中隊長は大隊長より大変なお叱りを受けていた。「あれ程発砲するなと言っておいたのに何故発砲したのだ」中隊長は返す言葉も無くうなだれていた。興安嶺の使命は敵軍を山中へ誘い込み、肉迫せん滅することであるぐらい素人にもわかる。後で中隊長の側近S上等兵から聞いた話だが、敵の戦車砲の攻撃が始まると、中隊長は酒、酒、酒と言って、壕の中で酒ばかり飲んでいたということである。また小隊長代理の上原曹長は、戦車砲で尻の肉をもぎ取られ死ぬ直前に「中隊長は卑怯だ！」と悲痛な叫びを上げ戦死されたと聞いた。隊内では、部下思いでやさしい隊長として兵隊から慕われていたのに、場面が変われば不向きということだろうか。山中の集結地では、人員点呼の後、終戦を知らされた。何ということか。昨夕の戦闘で、田上軍曹や児玉伍長をはじめ、中隊の三割近い方々が戦死なされた。返す返すも残念でならない。今ここに集結している人等も、昨夜の戦闘では、生と死の間をさまよった人等であり、目は真っ赤に充血し、放心した人のように見える。後で遺体収容に行くことになった。白旗が無いということで、誰かがフンドシをかかげて行けと言ったのでドッと笑った。

それから二カ月近く、興安嶺の山の中の町ブハトで

過ごすこととなった。ここは興安嶺の中心地で、人口こそ少ないが、軍の司令部も置かれたところであり、食糧、衣料等の倉庫が密集しており何不自由することなく過ごした。

未開の地シベリアへ

九月下旬頃から、ソ連側の指示で部隊の編成が行われた。編成は一大隊千人が単位で、千人になればハイそれまでであり、分隊が途中で二分されようとおかまいなしであった。従って永い間兄弟のように過ごして来た仲間ともこれが最後の別れというケースも多くあった。私らも十月中旬、ブハトにも時たま雪のちらつく中を、ソ連軍歩哨の「東京ダモイ（日本へ帰る）」の声に送られて、貨車に乗って出発した。貨車にはすでに二段ベッドがこしらえてあり、一貨車五十人だったと思う。それでも中は身動きもできなかった。北へ向かう貨車の中で、みんな良い方へ考え、ウラジオストックから日本へ帰すと信じていた。ブハトを出発した貨車は国境の町満洲里を過ぎ、途中駅もない草原で汽車を止め、その頃すでに衣類に発生したシラミ取りなどしながらシベリアの奥地へと進んで行った。

やがてチタへ着き引込線に停車した。チタ駅で二泊し駅の浴場でシャワーを浴びた。入浴は二カ月ぶりである。チタ駅はモスクワとウラジオストックを結ぶ、いわゆるシベリア鉄道の線上にあり、かつてロシアが旅順への南下のため敷設した南満州鉄道への分岐点でもある。車内では、これから東へ行くか、それとも西へ行くかで話が持ち切りであった。みんなが眠っている間に貨車が動きだした。暗い間は方向はわからなかった。夜明けに誰かが大きな声で叫び出した。「西へ行きよるぞ！」それから皆でかわるがわる一つの小窓から外をながめ、朝の陽光を背に西へ進んでいる現実を確かめあった。万事休す。やけともあきらめともつかない気持ちであった。ブハトからソ連の歩哨が口癖のように言っていた東京ダモイの夢は消え去った。

それから何日が経ったのだろうか。放心したような日本人が列車から降ろされたところは、駅もない草原の真っただ中であった。シベリア鉄道は大都市以外はほとんどホームの設置はない。草原の何もない所に停

車する。私等日本人にとって、はじめて踏みしめるシベリアの大地、そこから始まる抑留の悲劇、この人等の約半数は生きて再び東京ダモイの列車を見ることはできなかったのである。

悲劇のナリーム収容所

列車を降りて、どこへ行くのか追われる羊の群れのごとく、そこにはかつての帝国陸軍軍人の姿は全く無かった。霜のおりる草むらに野宿して、翌々日、山の中のナリームに到着した。ナリームの村は二十戸ばかりで、収容所からは二キロメートル離れた丘陵地の斜面に点在していた。

到着した所には古い兵舎のようなものがあり、ソ連人はドイツの捕虜を収容していたと言っていたが、建物はかなり古く、反体制の政治犯を強制労働のため収容した跡ではないかと思われた。ともあれそこは私ら小野作業大隊一千人の二年にわたる伐採作業の拠点となる所であった。到着の翌日から早速自分たちの住居や外柵の設置に取りかかった。日本人は誠に器用で、はじめ家の建築法を教えたソ連人に半日もすれば教え返す有様で、ソ連人は舌を巻いてながめていた。小さな小屋であれ、大きな建物であれ、すべて丸太を横に積み重ねるログハウスである。しかもこれらはすべて、鋸と斧で仕上がっていく。難しいことは考えない。重なる面は平たく削るが、多少の隙間はかまわない。隙間には後で山ごけを詰める。更に上等に仕上げようと思えば、石灰を水で溶かして、その上から塗れば上出来になる。松林の中で野宿をしながら、一週間程度で四、五棟の建物、そしてそれを取り巻く外柵が完成した。外柵の四隅には内外を監視する高楼があり、四六時中歩哨がいて、特に柵内の様子を見守っていた。また、柵の内外五メートルの所には鉄線が張られて、それより柵の間は立ち入り禁止であった。後日、発熱した兵が立ち入り禁止の場所のきれいな雪を取りに行って歩哨に射殺された。自分が監視される柵を自分で作るという奇妙な結果であった。柵の出入口には小さな門番小屋もできて、収容所の体裁も一応整った。更に柵内では炊事場、物置など逐次でき上がるとともに、柵外では歩哨の住まい、収容所長の官舎、

パン工場等の建物もできていった。かなり経って、営門の前に営倉もできたが、抑留者に使用されたのは少なかった。

伐採作業

収容所の体裁が整った頃、作業大隊の本命である伐採が始まった。伐採するのはシベリア松で素性が良く、真っすぐな樹が真上に向かって伸びていた。切断すればどちらが根元かわからない状態であった。伐採に使うのは、両方から引く鋸（ピラーといって一メートルから一・五メートル程度）と斧（タポール）である。タポールは、木を倒すとき根元を削り、倒す方向を決めたり、倒した松の枝を落とし、また根株の皮を剝ぐのに使用した。切り倒した松はウラの直径に応じて、六・五メートル、五・五メートル、四・五メートルに切断した。切断した松は、トラック（独ソ戦中、アメリカからの無償軍需物資）に積み込みやすいように一カ所に集積しなければならない。伐採作業に対して運搬作業と言った。運搬作業では、小さい木は二人で、大きくなるに従って四人、八人、十二人、十六人と、テコの原理を利用して取り組んだ。元気な間はよかったが、食料事情が最悪になり、体力がなくなってからの運搬作業はまさに死ぬ思いであった。みんなで担いでいるとき、もし斜面の雪で足を滑らせれば全体のバランスが崩れる。この運搬作業が残り少ない体力を更に消耗していった。こんなとき元気な者だけで組んでやろうという人たちがいた。初めは四〇〇パーセントやったということで人もうらやむような大きなパンを食っていた。そのため他の人たちの食料が減らされていることも考えずに。しかし日が経つにつれノルマの基準が上がり、後ではいくら頑張っても一〇〇パーセントそこそこになり、ロスケにだまされたといって解散した。

山では、伐採の作業場に着くと、作業の前に、前日枝落としをした松の枝を山のように積んで燃やした。やせて体力のない抑留者にとって、こんなに暖かくありがたいものはなかった。マッチは無く、最初の火を起こすのには、原始人がやっていたように木と木をスリ合わせて、その摩擦熱で火を起こした。数多くの人

の中には、数多くの体験者がいるものだと感心した。後では燃えている根株に土をかけ翌日の火種にした。

伐採する山は、初めは収容所の周辺から始まり、だんだん遠くの山へと移っていった。後では歩いて一時間もかかるようになった。往復の二時間は労働時間八時間とは関係なく、結局朝早くから夜遅くまで働かされる結果となった。その頃になると、体はやせ細り、歩くことさえままならぬ状態で、二十歳過ぎの元気盛りの青年が路傍の小石にさえつまずいて転んだ。

伐採する山には伐採する箇所を決める責任者と、切った木のノルマを記録する人（女性のアーニャ）、そして私らが逃げ出さないように営舎を出た時から作業を終えて営舎へ帰り着くまで、ずっと監視を続ける銃剣を着けた三、四人の歩哨がいた。特にシベリア産の歩哨は目が尖っていて意地の悪そうな顔立ちをしていて、休んでいると「ダワイ、ダワイ（働け働け）」と言って銃剣で後ろからつついたりした。中でも一番うるさかったのが収容所長（中尉）で、山の仕事場に来ては「ダワイ、ダワイ」とわめきながら山を駆け廻っていた。顔が赤かったので赤鬼と呼んだ。赤鬼が作業場に近づくと、遠くの方から「オーイ、赤鬼が来るぞ！」と伝声が飛んだ。

ナリームは、九月に入ると雪が降り、十月上旬には零下十五度になる。体で寒さを感じるのはそれくらいの温度までであり、それ以上温度が下がっても冷たさは感じなくなる。それは夏から冬に向かうために冷たさを強く感じるのかもしれない。抑留者は、タオルで頬かむりして、防寒帽をかぶり、目だけ出していた。息でまつげは凍って真っ白になり、いかにも寒そうに見えた。そんなときソ連の子供らは丸裸で雪の上でキャッキャッと言って遊んでいた。子供の頃から寒さにはこの通りであり、ソ連人の寒さに対する抵抗力は相当なものと思われる。ナポレオンやヒットラーの敗因はこの辺にあるのではなかろうか。十一月から三月まではナリームは常時零下四十度である。時には零下六十度にもなった。伐採作業は零下六十度になってはじめて中止になった。ある日、零下六十度にもかかわらず、収容所長は私らを作業に駆り立てようとして、営

門の前に整列させていた。そこへ老軍医が駆けつけてきて、作業に出してはいけないと言っていた。しばらく二人のやり取りが続いたが、結局中止になった。ノルマを上げたかった収容所長は、ツバをぺっと吐きながら去って行った。私らにとっては万歳である。その日は作業中止となり一日中ゆっくりと休んだ。

営舎内は、初めは三段ベッドであったが、いつの頃からか二段ベッドになった。ベッドと言っても、松の木を組み合わせ、その上に松を板状にそぎそれを並べ、その上に湿地に生える柔らかい草を敷き、服のままごろ寝するのである。部屋には暖房のため大きなペーチカがあり、閉め切った部屋でペーチカの鉄板が真っ赤になるまで燃やせば、上段の人は暑いと言うし、下段の人はまだ寒いと言って、夜はいつも言い争った。ペーチカを焚く時間は夜の八時までと決められていた。私は下段のベッドに起居していたが、ある晩、冷え込んだので、八時を過ぎて薪を数本ほうり込んだ。外から見れば煙突から火の粉が出るのですぐわかる。歩哨がどなり込んで来た。仕方なく名乗り出た。通訳が「営倉へ入れると言っています。謝ったがよいですよ」と、零下何十度の中で営倉入りは死につながる。私は、「寒くて眠れない、眠れないと明日の作業に支障するので燃やした。今後はしない」と言ったので許してくれた。

食料事情

終戦時、部隊の集結地、興安嶺のブハトでは、食料はあり余る程あり、皆もりもりと太っていたのだが、食料の乏しいナリームで一カ月も過ごすうちに体はやせ衰え、その上強制労働にこき使われると栄養失調で倒れる者がぼちぼち出始めた。ナリームでの食料は誠に粗末なもので、一食として与えられるパンはマッチ箱程度のもので、副食はほとんどなし、まれに塩汁や青トマトの塩漬け、また、あるときは、何十年か昔、日本軍が貯蔵したと思われる高菜の干物、それでも無いよりましと喜んで食べた。シベリアは不毛の地であり、食料は本国に依存しているのではないだろうか。ある晩の夕食は高粱汁であった。一人の人が汁だけ先に吸って後に残った高粱粒を数えたら十三粒あったと

言っていた。入ソした頃から抑留者の食料事情は極度に悪くなっていた。あるとき粟の配給があった。鶏の飼料である。高粱と同じく、すべて満州からの戦利品である。このときの粟の量は充分過ぎる量であった。炊事係が何時間も炊いたが粟粒は固いままだった。仕方なくそのまま夕食として配った。みんな喜んでたらふく食った。だが後がよくなかった。何時間炊いても固いままの粟粒は、人間の胃袋では消化できなかった。全員下痢をして、寒いシベリアではそれがきっかけとなり下痢がとまらず、体力が衰えて死んでいく人もあった。

栄養失調

一千カ所にも及ぶシベリアの収容所の中でも、ナリーム収容所（第二十四収容所第四支所）は特に死亡者が多かった。そのためチタの司令部から度々調査に来た。一回目は尉官の方が、二回目は佐官の方、そして三回目は司令部のかなり上層の方だということだった。この頃作業大隊長であった小野少佐は「食料が極度に少なく、生命を保つこともできない。その上伐採のノルマが厳しい。これでは死ぬしかない」という旨のことを強い語調で具申しておられた。司令部の方は「食料は充分とはゆかなくても、他と同じように支給してあるはずだ」と言っていたが、後で内部調査を行ったようである。その結果、通訳の話では、毎週チタへトラックで食料受領に行くが、その都度歩哨が三人ばかり同行し、帰りは途中で一泊する。その折歩哨等は泊まった所で遊んで帰り、遊ぶ所で私らの食料を横流ししていたということである。歩哨たちは処分を受け交代した。また同じ頃収容所長の赤鬼も交代し、新しい収容所長が着任した。その後の食料事情が良くなったかどうか記憶にない。新しい所長は、赤鬼以上に山に来てはダワイダワイと言って仕事を強要した。色が白かったので青鬼と名付けた。青鬼のときも赤鬼同様、山へ来ると「オーイ、青鬼が来るぞ！」と伝声が飛んだ。

少ない食料と過酷な労働、こんな状態が続く中で十二月を迎えると、栄養失調による死亡者が目に見えるように増加していった。初めは一人二人であったが、

だんだん数を増し五人、六人となり、更に日を追って十人、十一人と増加し、一番多い日は一日で十六人にまでなった。ある日、私の隣で起居していた田中さんは、伐採を終え営舎へ帰り着くと「アー、きつかった」と言って横になった。夕食が来たので起こしたが起きようとしない。よく見るといつの間にか息絶えていた。栄養失調の死は眠るように静かに死んでゆく。

老軍医

ナリーム収容所の死亡者があまりにも多いので、チタの司令部より再三調査に来たことは前記の通りだが、その結果大変ありがたいことがあった。それは司令部が老軍医を派遣してくれたことである。階級は中尉だったが、話によれば少佐のとき上官と喧嘩をして中尉に格下げされたという骨のありそうな軍医だった。それまで軍医と名の付く女医がいたのだが、健康診断といって私らを裸にして尻の肉をつまんでは「ハラショウ（よろしい）」と言うことだけの存在で、尻の肉がついていればまだ働けるということであった。病気のときも体温計だけが頼りで、三十八度になれば一日休養をくれた。面白いことに体温計は脇に挟んで擦るといつでも三十八度になった。聴診器は首に下げてはいたが患者に当てたことはなかった。

老軍医は私ら全員の健康診断を実施して、働ける者、チタの病院へ送る者、収容所内で休養させる者とに区分けした。その結果、働ける者百二十人、チタの病院へ送る者二百余人、しかしこの方々は自分の命の維持ができるかどうか難しい方々であった。後の方々は練成班と言って営舎内で休養した。その練成班の中からも暫くは死亡者が続出した。練成班での病人食は、入ソ以来見ることもなかった大豆をトロケルようにやわらかく炊いて与えたりした。これまで骨皮だった人等も、日を追って元気を取り戻していった。二十歳過ぎの若い人等であり、食べ物さえあればすぐ元気を取り戻す力はある。あと一週間の生命だろうと話し合っていた私もまた練成班で命拾いをした一人であった。後になって老軍医の到着があと一週間遅れていたらと真剣に考えることがあった。

また、軍医は営庭に半地下の入浴場を作り、そこに

衣類の煮沸場と乾燥場を併設し、入浴を定期的に行うと同時に被服の煮沸を行い、それまで手の施しようのなかったシラミの猛威を見事に退治したのである。そのおかげで私らの身体の僅かな血液をシラミに吸い取られることなく、夜は気持ちよく休むことができ、一時流行した発疹チフスも影をひそめた。同時に、死没者もほとんど出なくなった。練成班の人等の健康も日に日に快復していった。一、二ヵ月して順次仕事に復帰したが、伐採にしても、以前のようにダワイダワイではなく、自発的に仕事ができる状態であった。老軍医はみんなから神様のように慕われ、途中で会えばお互いニコニコして挨拶を交わした。

遺体埋葬

一方、死没者の遺体は、初めの頃は穴を掘り埋葬したが、十一月になり寒さが厳しくなると地面が凍結して、鶴はしを打ち込むと地面は鉄板のようにかたく、火花を散らして跳ね返した。仕方ないので火を焚いて表土を解かし、解けただけ排土してまた火を焚くことを繰り返したが、一日やってせいぜい二十センチぐらいしか掘れなかった。そこに遺体を十体程度積み重ねて、後は雪をたたきつけておいた。五、六月頃になり土の凍結が解けてから、その隣に穴を掘り埋め替えた。遺体は未だ白骨化しておらず、掘る土には遺体のしみがにじんでおり、遺体埋め替えの後はにおいが体にしみて二、三日食事も取れない程の大変つらい仕事であった。冬の間死亡者が増加する中、埋葬できない遺体は倉庫を一棟あけて遺体安置所と名付けて安置した。遺体は冬の間、はだかで凍結のまま、うずたかく積み上げられていた。遺体は春になり凍結が解ける前に山へ運ばれ、雪で覆って仮埋葬した。

使役

作業には伐採だけでなく使役があった。遺体の運搬や埋葬も使役で行われた。その他使役を言ってくるのは大抵夜中か休みの日が多かった。そのため初めの頃は、こんな夜中にとか、休日なのにといった考えで、使役に出るのはいやで仕方なかった。ところが、だんだん要領がわかるにつれて自分から進んで行くようになった。要領とは次のようなことである。夜中の使役

は、トラックから糧秣を下ろす仕事がほとんどで、食糧の入った麻袋から中身を引き出し、ポケットいっぱい入るだけの食糧を盗んで持ち帰った。後では食糧を入れる袋を背中に下げて使役に出かける人もいた。また、休日の使役は、歩哨小屋か、上級者の家屋の掃除とか薪割りであった。帰りにはパンかタバコをくれた。いずれも皆が欲しがるもので、ちょっとした優越感であった。なかでもタバコの好きな人は、あの不足する食事の中に、一食のパンを食わずにタバコと交換する人もいた。

また、あるときは馬鈴薯の植え付けということもあった。たしか二年目の春のことで練成班にいた頃のことだったと思う。袋に入ったまま渡された種芋は親指の爪ぐらいの誠に小さいものである。一人一組で横一列に並んで、前の人がスコップで土をこね開け、後の人がその中に種芋をほうり込んで足で土をかぶせて行く、誠に単純な仕事である。ちなみに植え付ける土地は四、五年置きに循環して肥料もやらない。収穫時には、同じように小さい馬鈴薯が四、五個ついている。数字の上からは四、五倍になる。ところで馬鈴薯は抑留者にとって大小にかかわらずノドから手の出るような大事な食料である。何事もなく終わるはずがない。そのうちに二、三の人等が一つは土に、一つはポケットにという具合になった。それに気付いたロスケが植えたばかりの種芋を掘り返し始めた。一つには種芋があるが一つは何も出てこない。「ヨッポイマーチ（馬鹿野郎！）」どうなることかと気をもんだが、この監督は立派だった。何も言わないで最初からやり直しということで収まった。先方も、抑留者を使役に使っている以上、事を荒立てることを好まなかったのだろう。

歩哨事情

ナリームには私らを監視するための七、八人の歩哨がいた。歩哨の長は、軍曹で顔立ちがよく、シベリア産の目の鋭い兵と異なりおっとりとして、一目でわかるウクライナ産の美男子だった。その軍曹が結婚して目の覚めるような美人妻を連れて山へ戻って来た。そして二人は歩哨の兵舎とは別の一棟に新居を構えた。

その軍曹が何かの用件で司令部のあるチタへ出かけて家をあけた。その晩歩哨の中の一番若い兵隊が据え膳にあずかったらしい。翌日その若い兵隊が軍曹に追い回されていた。どうしたのかと別の歩哨に聞いたら前記の話が返ってきた。若い頃にはよくある話だが、一番若い兵隊を他の歩哨がみんなでそそのかし、若い兵隊はそれに乗って実行に及んだということだろう。ともあれ、この何の楽しみもない山の中へ、あまりにも美しい若妻を連れて来た軍曹にも一縷の落ち度はあるだろう。

伐採する作業場には、記録係としてただ一人アーニャという若い女がいた。スターリンの悪口を言ったためウクライナからシベリアへ追放されたということだった。ある日歩哨が遠くの方でアーニャ、アーニャと呼んでいる。近づいて来る歩哨を見たら、銃剣を肩にぶら下げ、男性のシンボルを両手で握りながらアーニャを探している。私達の近くにいたアーニャは、それを見るなり深い雪の中を脱兎のごとく逃げ出した。二人共どこか遠く行ってしまったので後のことはわからない。ところで、そのアーニャは、日本人某少尉にずいぶんと熱を上げていた。作業が始まると少尉の名前を呼んで山を探し回っていた。しかし食糧難にあえぐ日本人には性欲のかけらも持ち合わせなかった。当時ソ連は、独ソ戦で多くの人を失ったため、女には出産を奨励していた。女と言えども働かざる者食うべからずの国で、妊娠すると出産、育児のため半年間公休を取り仕事を休んでよく、そのため妊娠を求める女が多くいた。

所持品検査

よく行われたのが所持品検査である。突然「東京ダモイ、全員荷物をまとめ営庭へ集合」半信半疑ながら、もし本当に帰るのであればと思って持ち物全部持って営庭に整列する。そこで持ち物検査である。時計、ペン、鉛筆、紙、小刀、また、女が好きそうな色のついた布などすべて取り上げられた。そんなことが数回にも及び、ついには何もかもなくなった。そして二年目の春、私にとってとうとう本物の東京ダモイがやってきた。定かではないが、そのとき東京ダモイで

呼び出しを受けたのは、ナリームの全員ではなく何十人かだったと思う。ロスケが口癖のように言っていたハラショーラボーター（よく働く人）から帰すのではなく、多分体の弱い人達からだったと思う。今も記憶に残ることは、木材運搬用のトラックの荷台に乗せられ、凍った河の上を猛スピードで走り、チタの収容所に着いたことである。また朝から登校する女子学生が物珍しく、いつまでも眺めていた記憶がある。また、食事のよいことに驚いた。日本へ帰る私らに対する特別食かと思ったが、以前からチタで働いているという人にたずねたら、これは普通だと言う。ナリームでもこれだけ食わしてくれたら一人も死なずによかったのにと思った。ソ連のようにすべて上から流れていく国では、都市に住む人と、ナリームのような山の中で暮らす人では、ずいぶんと不公平がある。私がナリームで体験したことだが、配給のときは員数を合わせるだけで、新品の靴も使い古しの靴も一足は一足である。

チタに何日いたかはわからないが、いよいよ乗船地ナホトカに着き、収容所の小高い斜面で日光浴をしていたとき、偶然にも同期入隊した同郷の河島敏行君と出会った。私はその頃下痢症状が続いていたのでそのことを話したら、腹に巻いとけと言って包帯を持ってきてくれた。舞鶴に上陸後私は舞鶴病院に入院したが、彼が早く帰って家に知らせていてくれたので、家の者も安心していた。

結び

ソ連が行った日本人の強制抑留は不法なものであることは言うまでもない。戦後明らかになったスターリンの北海道分割統治の要求が、米大統領トルーマンによって拒否されたため、その肩代わりに日本人労働者六十万人の強制抑留が行われたとも言われている。ソ連は独ソ戦で二千万人を失ったと言われ、戦後復興ができずにいた。従って労働力が欲しくて仕方なかったのである。ともあれ私らは強制抑留され、そのため六万余人の日本人が死亡された。その最大の原因は、六十万人の抑留者に対する食糧の手当てがなされていなかったことである。強制労働の過酷さより、また不慣れな極寒より、食糧不足による栄養失調が死亡の最大

の原因である。ナリーム収容所はその最たるものであった。作業大隊千人のうち入ソ一年目の一冬で三百六十余人の方が死亡され、更に栄養失調で他の病院へ転送された方々も恐らく生命を取りとめた方は僅かであったろう。従ってナリーム関係者は千人中、半数以上の方が帰らぬ人となられたのである。

私らは不法抑留の事実を永遠に申し伝え、六十万抑留者の一人一人の力を結集して、いずれの日にか死没者の怨念を晴らしてやらなければならない。

【執筆者の紹介】

出　生　大正十三年一月十七日、熊本県宇土郡大岳村（現三角町）に生まる。地元小中学校卒業。

入　隊　昭和十九年十月、ハイラル第三六二部隊に入隊。昭和二十年五月、幹部候補の集合教育中疾病。

開　戦　昭和二十年八月九日、ソ軍が侵略。同十四日、興安嶺免渡河にてソ軍と交戦。翌十五日終戦、武装解除。

入　ソ　昭和二十年九月中旬、興安嶺ブハトにて作業大隊編成、一大隊千人単位。十月中旬、入ソ、チタ山中のナリームに着く。作業大隊長小野少佐、全員伐採作業。

労　働　昭和二十年十一月から翌年一月までの間。

給　与　極度の食料難のため千人中三百六十余人が死亡、原因は食料の横流し。

死　亡　昭和二十二年春、ナリーム収容所の病弱者に東京ダモイが実現。五月、舞鶴に上陸。

帰　還　三角町議会議員、熊本家庭裁判所調停委員、同司法委員等社会に貢献さる。

全抑協活動　昭和六十二年四月、全抑協熊本県連合会会長に就任し現在に至る。平成六年八月、財団法人全国強制抑留者協会の指導によりシベリア死没者の慰霊碑を建立し、碑前で毎年慰霊祭を行う。

財団法人全国強制抑留者協会理事。
（熊本県　積　安夫）

シベリア抑留の想い出

宮崎県　鎌倉廣行

私は、昭和十九年十月一日に現役兵として山口の連隊に入隊したが、数日後、下関から釜山港を経て、東満州の間島市の連隊に転属。新兵教育を終了後、昭和二十年春から牡丹江に近いソ満国境で陣地構築作業に従事していた。ところが、八月九日の未明、ソ連が予告なしに参戦し、大型戦車を先頭に機械化部隊を従えて大挙して国境を越えて満州になだれ込んできたため、私の中隊は山中で不意を突かれ、応戦するいとまもなく、ソ連軍の前に敗退せざるを得なかったのである。小銃と軽機関銃だけでは大型戦車には対抗できず、昼は山中の穴に隠れ、夜になるのを待って山を下り、道なき所をさまよい歩き、かろうじて一命をとりとめたのであった。逃げながら私の目に映った国境の町の被害は大きく、日本兵や軍馬が無惨な死を遂げていた。草原でソ連戦車を待ちぶせていたと思われる兵隊が、自分で掘った壕の中に、あおむけに重なり合って死んでいる姿をみた時は涙が出た。追われている自分には、落ち着いて弔ってやることもできなかった。死体の顔は、真夏の陽を受けてまっ黒に変色し、眼窩だけが大きく落ち込み、腐爛した顔や手首の上をうごめく蛆を見た時の気持ちは言語に絶するものがあった。軍服の襟に光っている星だけがただ哀れで、立ち去る時は胸が詰まった。その兵隊は私と同じ新兵だったからである。

私はその後も身の危険を感じ、人目を避けて数日間、国境をさまよいながら逃走を続けている途中、敵の歩哨線にかかり、捕らえられて間島の連隊に連れて行かれた。そこで武装解除を受けた後、満州の各地から集結して武装解除を受けた非戦闘軍人の中に合流させられた。間島の連隊の錬兵場は戦争に参加しなかった軍人で溢れており、私の目には一万人を超している